

はじめに

日本建築学会は、学会として強震観測を行っている。このことは、大変珍しいことであろう。事実、地震工学あるいは地震学に関連する諸学会において、強震観測を実施しているという学会は寡聞にして知らない。

建築学会の強震観測は、1984年に建築会館に明石製作所の強震計 SMAD-1 を設置した時から始まっている。詳細は後述するが、その後会館における観測は脈々と受け継がれてきており、既にその歴史は20年を超えている。

建築学会がなぜ強震観測を行うのか、という質問に対する回答は、1984年当時の観測を紹介した大沢胖先生が述べられている。それによれば、

- 1) 広く建築学会会員各位に強震観測の重要性を認識していただくための礎となること
 - 2) 観測された強震観測を公表し、学術・技術の調査研究の活用すること（原文のまま）
- を目的としている。

日本建築学会は、これまでに多くの強震計メーカーから強震計の寄贈を受けている。強震計の管理主体は様々に変化したが、最近では構造委員会振動運営委員会傘下の強震観測小委員会が地震計の維持管理と記録の管理を行っている。同小委員会は建築会館における強震観測の推進のみならず、静岡市における共同強震観測をも実施した。また、寄贈された強震計の有効利用を図るために、強震計の日本全国も試みている。

強震観測小委員会は、ホームページを利用した情報公開、観測された記録の建築雑誌の公表などを行ってきており、上述の目的の一端を果たしているようにも感じられる。しかしながら、1997年以降デジタルデータの公開を行っていない。また、上述した静岡における共同観測の結果についても整理するの必要を感じていた。

そこで、建築会館における観測と静岡における共同観測の結果をまとめ、委員会報告とすることにした。さらに、報告書の内容についての審議段階で、建築会館における強震観測の経緯および建築学会が貸し出している強震計の観測状況も整理するの必要が指摘された。

つまり、本報告書は建築会館における強震観測を中心に、これまで強震観測小委員会が携わってきた観測を整理したものになった。この報告書が、有効に利用されることを期待する。

参考文献

- 1) 大沢胖(耐震連絡委員会委員長)：建築会館で強震観測開始,建築雑誌,vol.99, No.1222, 1984年7月, p(31).

(文責：強震観測小委員会主査，片岡俊一)